

巻 頭 言

研究者と自然保護運動

滋賀県立琵琶湖博物館 布 谷 知 夫

2008年は関西自然保護機構が設立されて30年であるという。就職してしばらくの時期にその設立に立ち会ったものとしては、ありきたりではあるが、時間の早さには驚くばかりである。

そして同時にこの間の自然保護の概念の変化もかなり大きいということを実感している。

その内容は、貴重な天然記念物的自然の破壊に対する反対運動としての運動から、身近な普通の自然を残そうという運動への変化であり、また自然の回復や復元への努力、無意識のうちに生活様式の変化の中から進む自然の変化への対応というような議論が起こっていることなどが指摘されているとおりである。

そうした中で私が関西の自然保護運動の一つの特徴であると思ってきた研究者と自然保護との関係の変化について触れてみたい。もとより厳密な論説ではなく、身近に感じている感想である。

私が日本自然保護協会関西支部の活動に参加し、また「自然を返せ！関西市民連合」の事務所などに出入りするようになったのは、1970年ごろだったと思う。当時の日本自然保護協会関西支部と「自然を返せ！関西市民連合」は、一方は研究者による、一方は市民による自然保護活動の関西における中心であり、各地の運動に対する相談役のような役割をしながら相互に行き来があり、役割分担をしているような状態であった。そうした中で私が初めて実践的に参加した運動は「猪名川の自然林を守る会」の応援であった。

この「猪名川の自然林を守る会」は、当時の自然保護運動としては例がないほどに新しい自然保護運動であり、また非常に関西らしい運動であったと思う。猪名川は兵庫県尼崎市を流れ、神崎川に入る川であるが、その尼崎市内で大きく蛇行した部分があり、その蛇行部分の川をまっすぐにして、跡地を市の水道施設(?)にしようとすることに對して工事の中止を要求した運動であった。発端はこの川岸林を毎日散歩のコースにしている大学の教員がその工事のことを聞き、こんないいところをなくしてしまうのはけしからん、と考えたことである。その方は知り合いの自然系の大学の先生などに相談をしてその林の生物調査をしてもらい、日本自然保護協会の関西支部などにも声をかけて反対運動を組織した。いわばごく最近の自然権のように、個人が楽しんでいる自然を奪われることに対する異議申し立てから始まり、周囲の自然の調査をして、その自然林が地域の中でも大切であることを主張し、また子どもにとっての身近な自然としても価値があるということを論じて自然を守る子供会なども作られた。結果は半分が開発され、半分が残るといういかにも日本的な解決をした。

このように、まだ自然保護の根拠が天然記念物的な貴重な自然の存在であった時代に、住民が暮らしの中で楽しんでいる場所であることを原点にして自然の調査をし、保護を訴えるという自然保護運動は当時は目新しいものであった。そして

う一つの特徴は、運動の中心となり、保護を訴え、役所やマスコミにと動いたのが研究者が中心であり、市民連合がその手助けをするような形で運動が展開したことである。実はこのような運動のスタイルは、大阪で同じ時期にかなり規模の大きい自然保護運動として動きがあった「淀川を守る会」や「南港の野鳥を守る会」でも同じ要素を持っていた。

大阪あるいは関西の初期の自然保護運動の中で研究者の果たした役割は大きい。本当の所、その原因はわからないが、表面だけを見れば、自然保護に積極的に発言をしていた研究者が日本自然保護協会関西支部で早い時期から結集し、市民グループとして活動をしていた若手の活動家や中心的な学生は、その初期には自然保護協会と連絡をとりながら活動をしていた。研究者と市民活動家との信頼関係が成立し、先に挙げたように最初から役割分担をしながら連携し、自然保護を訴えるためには研究者の自然に関する理論を根拠にし、研究者とともに運動を進める、という姿勢が全体にいきわたっていたということがあげられる。また研究者の側でもそういう現場からの期待にこたえるような活動が行われていた。その当時には全国的に見ても、自然保護に熱心な研究者として名

前があげられる方は、関西の研究者が多かった。そしてこの日本自然保護協会関西支部が、独立する形で独自の研究者を中心とした自然保護組織として設立したのが関西自然保護機構である。

では現在はどうなのであろうか。一言でいえば、研究者がいなければ自然保護運動は成功しない、というような状態はなくなっているのではないだろうか。市民運動の蓄積は大きい。状況を見ながら工夫して運動を進めていくような市民運動が展開している。しかし、自然保護ということが対立から、多様性や遺伝子の保護などという目には見えない保護が中心課題となっている中では、研究者の役割はもっと大きいのではないかと思う。そういう意味では運動の中で研究者の姿が見られることが少なく、また運動側から頼られ、相談を受けるという場面も減少しているのではないだろうか。私は研究者の役割を、基礎的なデータを集め、情報発信するということに加えて、保護運動にかかわりをもつということまで広げたいものだと考えている。関西自然保護機構が市民活動を行う団体とともに活動を行うという体制で再出発した今、これからの活動の方向性を考える中で、研究者にとっての自然保護という課題が常に存在していると思う。